

の方を見ました。明らかに娘さんは下着を着けていない
くて中が丸見えだったのです。食足りずして私たちは
性欲など忘れ去っていたのですが、「娘さんよ、あり
がとう」と、そのとき見た者、皆、そう思ったこと
でしょう。私も今も思い出すのですから。

昭和二十二年二月、私は栄養失調で入院させられま
した。なかなか立派に見える病院でしたが、軍医中尉
と三人ほどの衛生兵で、私も手伝いをさせられました。
昭和二十二年六月初めに帰還命令を受け、六月六日
ころナホトカへ。六月十日舞鶴へ上陸し、十一日故郷
海南駅に着きました。自宅までぶらぶら歩いて帰りま
した。街は静かでした。家には母一人、「突然の復員」
に驚き、大いに喜んでくれましたが、父は二十一年、
他界していました。

私は六カ月静養後、川崎造船に就職。昭和二十四年
同所閉鎖で退職し、木工自家営業。昭和二十六年結婚。
昭和三十年、井本木工所と合併。同所勤務四十年間。
私の戦後五十余年は順調。余生は楽しく生きたいと
思っています。

赤松との格闘

島根県 田辺勝義

入ソ

黒龍江を渡って初めてソ連の地を踏んだのは二十年
九月十一日だったと記憶している。私達がチタ地区の
ジップヘーゲンという土地に連行されたのは忘れもし
ない十月二日で、シベリアはすでに冬で毎日吹雪が舞っ
ていた。慣れないあの寒さは身にこたえた。ここが私
達のいつまで続くかわからない生活の地となるらしい
のだ。ところが、入る家もない。持参の日本の天幕を
建てて当分はそこに落ち着き、その後、私達で伐採し
た木材で収容所を建築して本式なラーゲル生活になっ
た。住む所から私達の自給自足によるもので、いかに
日本人の強制連行が場当たりの急な施策であったか
をうかがい知ることができるのである。

伐採作業

私達の作業は伐採であった。主として赤松で、白樺や落葉松も少しはあったようだが、直径一メートル以上のそれらが広大なシベリア平原に林立している姿は壯観であった。それを二人用の鋸で両方から引き押しして切るのだ。地上二、三十センチで切り、切り株は枯れるように皮をむく。切り倒すと幹を二メートルに切断し、枝は切って寄せて山にし、後で焼くのだ。ただでさえ固い材質の樹木が凍っているときだから作業は難渋し、二人で二メートルの丸太を、三メートル幅で一メートルの高さに積むというノルマ達成は大変であった。積んだ丸太を後からノルマ検査員が木口へ墨をつけて回る。私達はその木口の近くを切断し丸太の再利用の作戦に出たが、バレてしまってからその手も駄目になったという笑えぬ話もある。

また、その丸太を自動車の積み込み場所まで馬そりで搬送する作業もあった。その際は良い馬の取り合いが始まる。馬糧の取り合いが始まる。馬糧は高粱や燕麥だったから、くすねて食べる事ができるのである。こんなむき出しのすさまじい光景もあったのだ。

零下四十度以上になって作業がストップされても作業量は減るわけではない。しかし、あまりに寒く焚き火の前で半日も座り込んでしまうと、さすがにノルマを下げてくれる。すると少ないノルマを早く片付けてしまう。相手はこれを見てまたノルマを上げるといふイタチゴッコを繰り返したこともあった。

食べ物

食べ物に関するエピソード。

夜間、倉庫から糧秣輸送のそりが馬鈴薯を落としている。しめしめと密かに拾って持ち帰ってみると、大部分は凍った馬糞であったという笑えぬ話。

娯楽用の花札やマージャンを作って、それを欲しい者に売る。買った者はその代償にパンを提供し、一週間はあのひもじい中がまんしていたという、人間の価値判断の相違も見せつけられたのだった。

最初の頃は馬鈴薯を茹でただけの食事や、大豆粕を固めた豆板だけのお粥もあったが、これは食べられなかった。二年目ごろから馴れてきて、そこら一面に生えているキノコやタンポポなど、野草も食べることを

覚えた。また赤松の白皮を煮て汁を捨て、食事の時残しておいたニシンを少し入れて塩味で食べたのも特別な思い出である。

寒さ

零下四十度以上になると作業もなくなり、そんな日には庭一面に毛布を広げて干すとシラミが凍死するという知恵もあった。

零下七十度も一、二回は経験した。そんな日にはまばたきと涙^{はな}ずすりは止めてはいけない。まつ毛や鼻毛がすぐ凍るからだ。鼻の頭が白くなってさわるとペロリと皮がむけるので、細心の注意が必要であった。

私の幸運

将校は住居・食事・労働は別格扱いで優遇されていた。途中から将校全員が他のラーゲルに移された。それまで私は獣医官の当番をしていたので、いろんなおこぼれにあずかり、死者の多く出た最初の頃は助かったのであった。また、終わり頃はソ連の女医の当番みたいなおこぼれもさせられていて、それも元気で復員できたことこの理由の一つかもしれない。私のラーゲルは民

主運動も低調で、その苦勞もなかったと思う。最後にナホトカへ着くや腹痛で入院し、あきらめていると、間もなく病院船高砂丸が来て無事復員できたのであった。

考えてみると、他の方達より幸運に恵まれていたわけだったと思う。だが、そのことを喜んでいただけはすまされない。死者のご冥福と世の平和を祈るのみである。

労苦懐かし

愛媛県 田坂 正

大正十二年八月十七日生まれ。昭和十八年前期徴集、第一乙種。飛行兵と国が勝手に決めた一体の戦闘ロボットである私は、戦争という畜生道へ向けて歩む。防諜のためとて、旗なく、幟なく、歓呼の声なく、送る者は、私が今出てきた会社の玄関にそれとなく佇む数人のみ。昭和十九年三月三十一日午前九時、満州国鞍山